

# あの日の 決断

岩手の経営者たち

西部開発農産

▽④△

## 照井耕一さん

「自慢じゃないが、牛のことならプロだと思っている」。

北上市和賀町後藤の西部開発農産の前社長、照井耕一さん(74)が胸を張る。同社はコマや大豆、小麦などの大規模作付けで成長したが、肉牛事業(約250頭)も年に約6千万円を売り上げる基幹事業の一つだ。

照井さんの実家は元々、母親のフクエさんが乳牛を飼っていた。照井さんは高校卒業後に就農すると、付き合いのあった獣医師から農業の手伝いを頼まれるようになった。

動物の診察を見聞きするうちに「(処置方法などは)だいたい分かるようになった」と照井さん。まだ法人化する前、最初の妻を病気で亡くしたことで、実家も重労働の酪農から肉牛の肥育に切り替えた。



肉牛の繁殖と肥育の一貫生産を行う西部開発農産の牛舎。事業の多角化は経営の安定と雇用維持につながっている＝北上市和賀町岩崎新田

## 通年作業で雇用維持

## 経営の多角化

10年ほど前には、経営不振からオーナーが次々変わった同市和賀町岩崎新田の牛舎を購入。「牛はストレスを与えると太らない」と飼養頭数を絞り、品質の向上に努めた。その後、繁殖との一貫生産に乗りだし2011年、全農主催の肉牛枝肉共励会(和牛雌の部)で最優秀賞を獲得。「言行一致」を証明してみせた。

肉牛事業は、新たな展開もみせる。長男で現社長の勝也さん(49)が主導し昨年10月、同市北鬼柳に焼き肉店「まるぎゅう」をオープン。同社生産の牛肉は「きたかみ牛」ブランドで提供し、店の初年度売上高は1億円を突破した。

ロングセラーの「ひまわりみそ」の製造や野菜栽培を加えた同社の複合経営は10年、日本農業賞大賞として結実。照井さんは「大賞は誇りになった。全国に知られることで、責任の大きさも感じる」と、モデル経営体の自覚を強める。

同社の4月現在の従業員数(役員除く)は社員45人とパート60人の計105人。通常の農業経営は、田植えや稲刈りの季節こそ多くの人手が必要な半面、冬場の作業は限られる。「高速道の除雪をやらないか」。

知人から声を掛けられたチャンスに逃さなかった。農機操作に慣れた社員たちにとって、除雪は格好の仕事になった。パートには野菜栽培と大豆の選別という作業を用意した。

「除雪は安定した収入があり、会社の収益力をアップさせた。パートさんも仕事が通年であれば、安心感を持って働いてもらえる。人はうちの宝であり、財産」。照井さんは感謝を忘れない。

規模拡大と海外への近代農業の普及を目指し、ベトナムに進出した。しかし現実は一層厳しく、自身も思わぬ大病に見舞われた。